

經濟論叢

第138卷 第5・6号

企業グループと産業融合……………	下谷政弘	1
現代フランクフルト学派統計学の課題……………	長屋政勝	28
トヨタ自工における委託生産の展開……………	塩地洋	52
西ドイツ共同決定制の形成……………	久本憲夫	78
日露戦争以降の財政・金融構造……………	片山徹	96
書 評		
渡辺利夫著『開発経済学』……………	上田曜子	115

経済学会記事

經濟論叢 第137卷・第138卷 総目録

昭和61年11・12月

京都大學經濟學會

現代フランクフルト学派統計学の課題

——フランクフルト学派統計学の展開（2・完）——

長 屋 政 勝

I 批判と反批判

プリント報告「社会統計的認識の問題と特質」は1950年代のフランクフルト学派のよって立つ共通の立脚点を明確にし、さらにその理論的前進をも提示する。共通の立脚点とは、第一に、社会統計的認識の自立性、逆にストカステークの特異性とその限界を確認すること。フラスケンパー二元論の継承である。第二に、理念型としての社会科学的理論概念と数量把握に結びついた統計的概念との不一致問題を前面にうちだし、その間隙をうめることを社会統計学のとり組まなくてはならない最優先の課題に設定したこと。すぐのちに議論される「調整問題」である。以上の二点において、プリント報告は1940年代にフラスケンパーの定式化した社会統計方法論の方法原則を再確認し、これをこの学派の理論構成にとっての共通の基礎とするものであった。また、理論的前進は社会統計的認識の中に独自の確率判断をくみ入れようとするものである。この確率判断は一すでに説明したように一必ずしも数量（値）的表現と結びつくものではなく、いままでのところ熟練した統計家の直感なり手腕にまかされていた事柄の確からしさについての判断様式を明確にし、かつ他人にも教授することができるような規則として定式化、方法化することである。ただ、1953年段階ではこのための具体的取り組みはまだ始まっていない。だが、これはフラスケンパーの戦前残した課題、すなわち、社会現象の大きさ、構成、成長の記述を主たる認識目標とする社会算術としての社会統計方法ははたして法則志向的認識とかかわることができるのか、またできるとすればそれはどのような形にお

いてかという問題を自ら真正面に受けとめ、その解決を数理統計学にまかせるのではなく、まさに社会統計方法論に固有のものとしたのである。以上の意味でプリント報告はフラスケンパー統計方法論上の原則を再確認しつつ、そこに残されていた不明部分—統計による記述と統計による法則追求との関連—を明るみにだし、その後のフランクフルト学派展開の契機をなすものであった¹⁾。

さて、プリント報告にはフラスケンパーを始めとするつごう十人のコメントがつけ加えられる。その多くは数理統計学派による批判的懐疑的コメントである²⁾。

まず先頭のコメンターとして立ったフラスケンパーは次のようにのべる。プリントがストカスティックのもつ制約を明白に根拠づけたことを高く評価しなくてはならない。すなわち、社会統計的認識にはストカスティッシュなものとは区別される別の認識目標がある。それは社会現象の意味連関的記述である。この記述にとり、数量的確認は事実のひとつの側面を語るにすぎない。しかし、

1) もともとプリントは統計による因果研究法のあり方に大きな関心をもっていた。A. Blind, *Statistische Ursachenforschung, Die Statistik in Deutschland nach ihrem heutigen Stand*, Bd. 1, hrsg. von F. Burdörfer, 1940, SS. 53-69. を参照。戦後、問題意識はストカスティックを狭い確率数理に限定せず、社会現象にもみられる事柄の確からしさについてのより一般的な確率判断様式=社会統計のストカスティックの構成へと拡がってゆく。この試みは、「第二次大戦後、フランクフルト学派の人々、とくにプリントおよびハルトウィックによってなされつつあるところの確率算的手続によらないで統計の蓋然推理を方法化しようとする努力は、それ自体フラスケンパーの難点を明るみに出すものとして、われわれの注目をひく。」(有田正三『社会統計学研究』昭和38年、252ページ)といわれる。この点で、このプリント報告は1950年代のフランクフルト学派の「理論的前進」を意味する。と同時に、有田氏はプリント報告にあるものがすことのできない欠陥として、社会統計のストカスティックの具体的肉づけが貧弱であり、あまりにも抽象的すぎることを、社会統計の方法を具体的個物の数えあげの点で自然科学の方法と同類のものとしながら、なおかつ社会的認識の自立性を主張することの矛盾、理論的認識と統計的認識との間隙を強調することによって不可知論の要素を含んでいること、などを指摘している。そして、これら一連の問題点が、フランクフルト学派統計学の新カント派の認識論への傾斜、および事物論理と数論理の平行論からくる方法の批判選択への終始にもとづくものであると批判している。有田正三「社会統計的認識の問題と特質—プリント教授の見解について—」『彦根論叢』(滋賀大学)第43号、昭和33年5月、26、36-37ページ。

2) プリント報告に対するフラスケンパーを始めとする十人のコメントは、O. Boustedt, *Rundschau; Die 24. Jahresversammlung der Deutschen Statistischen Gesellschaft, All. St. Ar.*, Bd. 37, 1953, SS. 332-52. に収録されている。[以下、文中での引用では、Rundschau. と略記する]足利末男編訳『現代社会統計学』昭和42年、81-114ページ。

そのためには特別の方法が必要となる。社会的事実の計数と計測；すなわちフラスケンパーのいう社会算術である。これは個物の単なる数えあげには終らなく、計数と計測に適した特別の概念が必要である。すなわち、理念型としての理論的概念を統計的に利用可能な概念に移しかえる社会統計に独自の問題がでてくる。しかし、この移しかえによっても、理論的概念と統計的概念との間には不可避的な不一致が残る。これを最少にとどめることが社会統計にまずもって与えられる課題となる。社会統計方法はストカステークによっては決して片づかないこのような独自の問題を多くかかえている。ここから、確率論を基準にした一般統計方法論には解消できない独立した社会統計方法論確立の必然性がでてくる。フラスケンパーはこのように主張し、プリント報告の全面的な擁護—というより、その基礎づけ—を行う。

続いてフランクフルト学派の一人として立ったハルトヴィックのコメントは、のちにアンダーソンをして「かなり攻撃的であった」(Rundschau, S. 352.)といわせるほど、社会統計的認識とストカステークの対立点を鋭く追求し、両者の方法原則上の差を明確にするものであった(Rundschau, SS. 336-9.)。

統計的認識は一ハルトヴィックの見解によれば一多様な経験(感覚の混沌)の中にあらわれる要素を一般的認識原理にのっとり集団として構成するところから始まる。いままでこの認識原理としては確率論が妥当するものと考えられてきた。だが、プリント報告によって、確率論は社会統計の認識原理とも認識方法ともなりえず、社会統計学の絶対的自立性が可能かつ必然であることが示された。この可能性と必然性は次の諸点において考慮されなくてはならない。

まず最初に、すでに集団の構成にあたり、社会統計の独自性があらわれてくる。社会統計の集団はもともと統計的認識の対象としての類概念(Gattungsbegriff)、あるいは類対象(Gattungsgegenstand)としてではなく、本来的に理念型としての性格をもっている。この理念型を類概念に転化させることにはたえず論理的不一致がつきまとう。この不一致を可能な限り少なくする「概念上の調整理論」(begriffliche Adäquationstheorie, Rundschau, S. 337.)が社会

統計学には不可欠のものとなる。これはフラスケンパーのいう事物論理の問題そのものであり、数論理にも確率論の問題にも属さない。この調整問題の解明をへて始めて、次に統計数字が偶然的性格をもつものかどうかを検討可能になる。

次に、集団を特徴づけるための測度の規定についても、確率論に立脚した従来のやり方とは全く別の方向からの追求が行われなくてはならない。算術平均を集団の代表値として重視できるのは、ただ確率論的な問題提起の下のみである。例えば、フィッシャーの測度論では標本から母平均を推定するに際して、算術平均が最尤推定値とされるが、これは標本平均が確率論でいう三つの基準（一致性、有効性、充足性）をみたすからである。しかし、確率的情况を考えることのできない場合、算術平均にこのような特別の意味はでてこない。母集団をよりよく代表する測度としてモードやメディアンがとりあげられ、この方がより高い認識価値をもちうる場合が多い。例えば、特定の職業分野での賃金分布では平均値よりもメディアン、またはモードの方がはるかに多くの事物的意味をもっている。問題は確率論的にみた「最適計測法」(optimale Metrik, Rundschau, S. 337.) を求めることではなく、その時々¹の社会の文化的状態を最もよく表示できる数量形式を提示することである。例えば、生計費指数は家計消費支出という特定の文化的状態を可能な限り完全に記述しようとする中で科学的意味をもちうる。また、このような測度のありうる変化の「有意性」についても、それは標準偏差の大小によって記述されるのではない。確率論でいう有意や偶然とは関係なく、その時々²の歴史状況から判断が下されなくてはならない。このように考えると、確率論にもとづいた統一的な統計方法論の構成一つまり、ハルトヴィックのいう統計方法一元論は無意味、反理論的であり、現実を知らないものといわざるをえない。

そして最後に、統計的因果研究法に関してプリントの行った提案—確率数理とは別のより一般的なストカスティックの展開が必要である—が支持されなくてはならない。それは、あらゆる確率的判断を支える統一的な根拠を確立し、

そこから統計的因果研究の本質をなす確率論的手法（これは決して狭い意味の数理的確率論に限定されないが）を導いてくることである。いうまでもなく、このような手法が特定の微分方程式の形—数理的形式—をとる必要は全くない。より一般性をもった、社会統計的研究にも有効な確率判断様式を具体化してゆくこと、このことが今後のさし迫った課題とされなくてはならない。

この点に関し、従来の確率論は数学的構成をそのひとつの基本概念にまで高めてしまった。ここから、この基本概念の現実妥当性について不明で問題の多い議論がひきおこされてきた。ハルトヴィックはこれをあえて確率論上の「スキャンダル」（Rundschau, S. 339.）といっではばからない。社会統計学者こそ、この基本概念の解明を本来の任務とすべきであつたにもかかわらずである。この問題解決の途は一ハルトヴィックによれば、カントにならない純粹悟性概念をみいだす導きの糸、それを先験的に演繹してくること、この二重の方法の中にひそんでいよう。このことをつうじ、批判精神にのっとり自立した社会統計学を新たに創りだす。これが目下の重要な目標となる。

以上がハルトヴィックのコメントである。ここには、フラスケンパー以来の理論的概念と統計的概念との間隙（不一致）をいかにして最少限にくだとめるかが「調整問題」として明示されたこと、ブリントの提案を受けて事物的に意味のある測度論構成の必要が確認されたこと、そして同じくブリントにならない狭義の確率的推論（ストカステーク）をこえたより一般的な確率判断様式の必要が追認されたこと、しかもその構成はカントの批判哲学にならない、確率判断に一般的に妥当する基礎概念を論理的に導出するやり方によらなくてはならないこと—後述するハルトヴィックの「原因原理」がそれにあたるのだが—、以上の論点がくみ込まれていた。特に最後の点に、カント哲学に大きく傾斜し、それに造詣の深いハルトヴィックの強い個性があらわれている。

ハイデルベルク総会においてフランクフルト学派の三人の論者が登場し、統計方法一元論との対立点を明確にしたことは、「社会統計学の方法論の特殊性を徹底的に解明する」（Rundschau, S. 360.）ものであり、従前から社会統計

的認識にまつわる特殊な問題がストカスティークによっては決して解決されないことを主張し続けてきたフランクフルト学派の独自性をうかびあがらせるものでもあった。

これに対し、その他のコメントの反応はどのようなものであったか。ひき続き八名の論者が登場しそれぞれの立場からプリント報告を評価する。この中で数理派からの反撥が強い。わずか J. グリースマイヤー (シュトゥットガルト) と H. クルト (ゲッティンゲン) の両名が多年にわたる統計実務経験をふまえ、社会経済統計ではストカスティーク適用以前に調査や集計に多くの困難をかかえ、この現実的問題と対応してゆこうと数学的純化からは何ら新たな認識成果を期待することはできず、数理的手法の利用はごく特殊な領域で特定の前提の下でのみ可能であり、ストカスティークに対しては単に補助的な意義しか認めることができないとのべ、プリント報告に同調を示しただけである。L. ボッセ (ウィーン), N. ニコラス (ベルリン), H. ミュンツナー (ゲッティンゲン) らはともにストカスティークと社会統計方法の間に原理的対立があることを拒否し、それは単なる程度の差にすぎず、フランクフルト学派が社会統計的認識に固有のものとした問題(概念構成をめぐる間隙、歴史現象の一回生起性、等)は多少なりとも自然現象にもみられることであり、これを理由に両者の間に深い溝を掘ることに反対する。いうまでもなく、ハルトヴィックのいう統計方法一元論である。ボッセは克服されたはずと彼の考える旧来の科学哲学をもちだすフランクフルト学派の主張に驚き、その「認識論上のペンミズム」への陥りをいましめている (Rundschau, S. 340.)。

当然のことに、数理派を代表する W. ウィンクラー, H. ケレラーはフランクフルトの論者の見解を受け入れることを拒む。なかでもケレラーは挑発的である。プリント、ハルトヴィックの原則的な議論をあまりにも独断的ときめつけ、それを聞いていた自分は「統計学の会議の席にいるのか、それとも世界観の決定が問題とされる会議に列席しているのだろうか」と白問していた (Rundschau, S. 348.) と揶揄する。統計による記述では済まない、予測を中心とした

操作的な統計学 (operative Statistik) が必要であり、これは確率論的なケ
ンラーは帰納的 (induktive) という言葉をも用いるが一統計学によるしかなく、
また確率論の現実の成果をみればハルトヴィックのいう「スキャンダル」など
は論外であるときめつける。この観点から統計調査についても、あくまで標本
調査が基本にあり、社会統計では母集団そのものを直接相手にできる好都合な
状態にあるため、確率論の支えを不必要とすることができるだけと極論する。
ウィンクラーは、例えば、社会算術という言葉に固執するフラスケンパーの時
代遅れ一と、ウィンクラーには思われたもの一をはねつけ、またプリントの
「内的確率」を、それはかつてドイツ社会統計学で批判済みの統計家の「鋭敏
な感覚」と同類のものとみなし、そのあいまいさを衝こうとする (Rundschau,
S. 346.)。

これら論者のコメントが終り、最後にアンダーソン、プリントの両報告者に
結語を語る機会が与えられる。アンダーソンはごく簡単に、ドイツ以外の研究
動向をひきあいに出しながら一あるいは、それをかさにしながら一、フランクフ
ルトの論者の提起した問題は計量経済学やさまざまな実証的経済研究ですでに
とりあげられ、解決済みのものであり、改めて問題にするほどのものではない
と強弁する。他方、プリントは各論者の論評を卒直に受けとめ、一致できる点
とできない点をひとつずつ明確にしてゆく。それらは先の報告論旨をさらに具
体化、個別化したものといえるが、とくに「内的確率」に関するウィンクラー
の批判に対し、それが主観的感覚とは何の関係もなく、確率についての従来の
狭い枠組みをとり払い、確率概念をより一般化し、そのうえで社会統計を用い
た証明方法の規則を確立し教授可能な形にもってゆくことの必要性を再度強調
する (Rundschau, SS. 357-8.)。

以上みてきたように、1953年ドイツ統計学年次総会はフランクフルト学派と
数理統計学派の主張にみられる相違・対立点を克明にうつしだしている。もち
ろん、スイス、オーストリーなどの近隣国からの参加者を含めながら年一回の
全西ドイツの統計学者、統計実務家の会合という性格から、参加者、討論者の

多くはハルトヴィックのいう社会統計とストカステークの分割線をより以上に深めることに不安なり危惧をもつ。両者の違いを認めたとしても、そのうえになお統合の望みを捨てきれない。フランクフルト学派にしても、社会統計とストカステークのよって立つ基本原則の違いを明確にしたうえで、両者の統合の可能性を認めるのにやぶさかではない。しかし、いままでの議論から明らかかなように、数理派とフランクフルト学派とではその統合のあり方について全く異った見解をもっていた。すなわち、数理派はあくまでストカスティッシュな図式に固執し、それを社会と自然をこえたあらゆる集団現象にくみ入れ、確率論的手法を集団現象研究のための普遍的で一般的な統計方法とみなす。社会統計方法はこの一般の特殊化にすぎず、一般の単なる応用で済むと考える。しかし、現実にはそれは不可能であり、一アンダーソン報告にもみられたように一社会的独自性の問題を切り捨てたところにいるところの一般統計方法論が成立していた。これに反し、フランクフルト学派は社会統計的認識の独自性を前面におしだし、社会統計方法論の自立性を説く。逆にごく限られた特殊分野の研究手法としてストカステークを位置づける。ストカステークを吸収しながらも、その意義をきびしく限定し、成立領域をこえたその有効性を否定する。やはり、両者の間には社会現象に対する、また社会統計的認識に対するとらえ方に決定的な相違があるといわなくてはならない。

この和解しがたい相違点を明確にしたのハイデルベルク総会でであり、またプリント、それにもましてハルトヴィックであった。総会の表向きの主役ではなかったとはいえ、確かにハルトヴィックは二度のコメントの場でストカステークの根本的性格を問いつめ、社会統計的認識と確率論的認識の境界線が数理統計的研究の隆盛しつつある現状によっておし流されたり、統計方法一元論によって安易にくずされるものではなく、対象とする事柄の内容とそれに対する認識様式（概念構成）の本性にもとづくものであることを論理的に説得しようとした。ハイデルベルク総会でうきばりにされたフランクフルト学派の理論的独自性はハルトヴィックの主張の中に最も明確な形をとってあらわれている。

ハルトヴィックはストカステックの方法原則を究明し、このことによって社会統計的認識にしめるその役割を基本的には否定することになった。このことを自らペシミズムと表現していた。このペシミズムをかかえながら、しかし、ブリントが提起しハルトヴィックの追認した、社会統計を用いた確からしさの証明方法＝狭義の確率論的推論をこえたより普遍的な確率判断様式はいかにして構成されるべきか、この実に困難な問題をフランクフルト学派に課すことになったのもハイデルベルク総会であった。

II 原因原理と調整問題

ハイデルベルク総会の翌年、1954年11月24日のゲーテ大学経済学・社会科学部就任公開講演「自然科学的統計学と社会科学統計学」³⁾の中で、ハルトヴィックは改めて自己の見解を整理し、統計的合法則性成立の根拠を明らかにし、それと社会統計のかかわりを問題にする。さらに、ここから社会統計方法論独自の課題として再度、調整理論、統計的測度論、社会統計的因果研究の三つをあげ、社会統計学者によるそれへの取り組みの必要性を強調する。

まず、ハルトヴィックが問題とするのは統計的認識を根拠づける原理である。統計的認識とは、論理的に独立した同一の類に属する任意の数の個別的対象をとりあげ、それを思惟の中で明確に規定された全体にまとめるところに成立する。概念の中に対象の総体＝集団が構成され、それについての数量的言明（集団言明）がひきだされる。この操作なしに統計は成立しない。しかし、ここで無限に多様なものの中から、どのような個別事例・要素を類としてまとめるのか。これは決して恣意的な個別の抽出であってはならず、特定の原理にもとづき、統計的集団という論理的概念の獲得に妥当性をもたせなくてはならない。集団概念を可能にするこの原理こそ科学としての統計学を構成する第一の原理とな

3) H. Hartwig, Naturwissenschaftliche und sozialwissenschaftliche Statistik, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 112, 1956, SS. 252-66. [以下、文中での引用では、Statistik. と略記する] 足利末男, 前掲編訳書, 207-25ページ。

る (Statistik, S. 253.)⁴⁾。

ふつうの考えでは、このような原理はすでに確立しており、それによって統計学は科学の地位を獲得しているといわれる。この原理とは、一周知のゴールトンの台といわれる、偶然事例を発生させる力学的装置で例示される一同一条件下で独立した個別事例を多数回反復生起させると、個々の事例の不規則性をこえて集団全体にあらわれてくる合法則性である。ゴールトンの台では、漏斗状の箱から鋼鉄球を一個一個、規則正しくうちつけられた釘の中へ落下させる。この試行を多数回反復させると、最低辺の受皿へ落込む球の数の分布には中央に最大度数がみられ、その両側への対称的な漸次的減少があらわれてくる。結果的には左右対称で釣鐘状の分布がでてくる。

こうした合法則性を前にして、確率論では以前から好都合な事例と不都合な事例に対する「等可能性」を根拠にその成立を説明できうとしてきた。だが、この説明では十分に大きな試行系列をもたずに事例の等可能性を先験的にどのようにして知得できるかという本来的な難問を解決できない。また近時、R. v. ミーゼスが試行系列の中で特定事例のとり相対頻度の極限值を確率と定義し、このことから等可能性の前提なしに先の合法則性を説明できるとした。しかし、これもみせかけの解決にすぎない。つまり、ラプラス流の解釈もミーゼス流の解釈もこの合法則性の根拠づけには成功していない。

このような集団の合法則性を説明する原理は、一ハルトヴィックの考えによれば一経験の中にではなくあらゆる経験に先立って普遍的な必然性をもって妥当するある種の概念を導くことの中に求められるべきである。このような概念は、いわばカントの範疇に類するものであり、確率的事象なり統計的合法則性を根拠づける範疇が経験以前に論理的に導かれなくてはならない。いままでこ

4) ハルトヴィックがまず始めに集団概念の構成原理をとりあげたことに対しては、「その論述は、……、フラスケムパーの見解を継承しつつ、しかもそれを一段整備・深化させたものということが出来る。特に統計的認識における対象構成原理として統計的集団の構成原理を意識的に問題解決の鍵としてとり上げたことは注目に値しよう。」(有田正三「社会統計学の特質と課題—ハルトヴィックの見解について—」『彥根論叢』(滋賀大学)第119・120合併号、昭和41年8月、59ページ)と評価されている。

れが欠けていたがために統計的合法則性の理論的根拠づけも、確率論的思考を適用するための根拠づけも不首尾に終わっているといわなくてはならない。

個別事象生起の必然性は因果関係によって規定される。集団現象ではこの個別的な因果法則とは全く別に、同一条件下で個別事例の多数回反復があれば、個別（確率変数）の発現に伴う確率の大きさに特定の分布法則があらわれてくる。同じ条件下で同種の試行をくり返せば先と同一の分布がみられる。これは個別を規制する因果関係がどのようなものであるかにはかかわらず、それとは別の集団現象そのものにある一般的原因—あるいは本質的、ないし恒常的条件ともいえる—の同一性からひきおこされた結果とみなすことができる。先のゴルトンの台の例に戻ると、台のうえに規則的にうちつけられた釘の配置が一般的原因であり、これが変らない限り同じ形をした分布がいつでもどこでもあらわれてくる。逆に、釘を一本でも変化させれば、結果にあらわれる分布状態も違ってくる。このように、一般的原因は集団現象の数量的な特性値の分布法則を規定する。すなわち、「同じ一般的原因は同じ分布法則を必然的にひきおこす」(Statistik, S. 258.)。

因果関係とは別種のこのような集団的合法則性をひきだす根拠をハルトヴィックは「原因原理」(Ätialprinzip)とよぶ。この原理によって集団の合法則性を根拠づけ、確率的判断の客観的妥当性を保証することができる。この意味で原因性(Ätialität)はカントの原因の表にある共通性、相互作用の原理にとって替えられるべき基本概念=範疇に相当する(Statistik, S. 258.)。

このような原因原理は観念の中の対象とかかわることなく、ただ、實在だけと関係する。また、経験的個物の間に相互関係があり、因果的(関数的)関係のみられる場合には成立しない。すなわち、原因原理は同じ類に属する何らかの経験的個別要素をまとめ統計的集団を構成し、このことによって偶然をも含んでそれら個物を全体として結びつける自然の法則(分布法則)をみいだす原理である。この原理によってその他の方法をもっては得ることのできない法則的知識が与えられる。

自然科学的統計学とはまさしくこの原因原理にもとづいて、個別事例の総体＝集団を構成する方法を提供するものといえる。原因原理はつとめて自然科学的統計認識を支える根拠であり、ストカステークを構成する原理となる。

これに対し、社会科学的統計学はその前提、方法、認識作用においてストカステークとは全く異なる。もちろん、ここでも個別的因果関係ではなく、経験の多数性が問題とされる。だが、社会統計における集団の構成原理は原因原理ではなく、全く別の原理にもとづかなくてはならない。なぜなら、そもそも社会的集団は統一的な集団ではなく異質な部分集団の混合体であり、そこでは一般的原因の存在が始めから拒否されているからである。

社会現象はひとつの文化現象である。そこでは、個々の対象は歴史的にその時々を示される人間的価値と目的に主観の中で関連させられる。現実はその自然的関係からではなく、価値と目的との結びつきをつうじて始めて主観にくみとられ、新たなひとつの意味連関(Sinnzusammenhang)の中に位置づけられる。社会的現実をただその自然的関係からではなく、意味連関の中で把握することがあらゆる文化科学—社会科学をも含めた—の課題となり、普遍的な認識目標となる。ここでは自然科学と違って、現実を法則から説明する(Erklären)ことが目的となるのではなく、意味から現実を理解する(Verstehen)ことが究極の課題となる(Statistik, S. 260.)。

ここからまた、文化科学における概念構成には自然科学的概念構成とは違った独自の様式がでてくる。文化科学の概念は現実の事例から共通性をひきだすことによって作りあげられる経験的類概念ではない。現実価値も目的も含まないからである。それは人間思维の構成から合成される。経験そのものの中ではなく、歴史的に妥当する価値と目的の体系に照らして意味のある要素が統合されてでてくるものが文化科学的概念である。この点で、社会経済生活を理解しようとする場合に利用されるすべての概念、理論モデルは経験的類概念ではなく、M. ウェーバーのいう理念型としての性格をもつことになる(Statistik, S. 261.)。

当然のことに、社会科学的統計学も以上のような文化科学に独自の性格と概念構成をもつ。ここから、自然科学的統計学には決してあらわれない次の二つの問題がでてくる。これを解決することが社会科学的統計学の目下の最重要課題となる (Statistik, SS. 261-4.)。

第一に、「調整理論」の完成。理念型としての経済学的、社会科学的概念とあくまで類概念にとどまる統計学的概念の間には本性的に論理の間隙がついてまわる。この間隙を最少限にとどめることにより統計的研究は社会科学的研究としての資格を保持できる。意味内容の基準からみて重要な経済的社会的現実の特徴をとりだし、それを技術的に正しく数量化しなくてはならない。これが社会統計学の第一の課題となり、これを将来ひとつの完結した調整理論にもってゆかねばならない。この調整問題には確率論の入り込む余地は全くない。調整が済んで始めて、社会的集団現象にも原因研究が問題とされるようになり、その限りで先の原因原理に意義がでてくることもありえよう。

第二に、測度論の展開。社会統計的認識は単に集団の大きさの確認にとどまらず、集団の内部構成、相互関係、時間的变化の研究へと進む。この中で計算される統計的測度は、文化的に重要で、理解のゆく事実や関連について意味ある情報を伝えることのできるものでなくてはならない。例えば、特定の職業分野で労働者の所得に不均等分布がみられる場合、代表的賃金を算術平均値で測定しても意味はないのであって、メディアンなりモードの方により大きな意味内容がでてくる。生計費指数の算定に際しても、その時々文化状態に照らして勤労者世帯の生活実態を可能な限り完全にうつしだす指数が問題になるのであって、この点で I. フィッシャーの物価指数算式は事物的に深い意味をもつことはできない。測度の計算は数学的基準、ないし最適の計測法という基準から行われるのではなく、文化的に重要な存在と生起に対する有意味な徴候 (Symbole) として規定され測定されなくてはならない。

以上の調整理論の完成、測度論の展開をまずもって社会統計学のとり組まなくてはならない最初の課題とハルトヴィックは考える。しかし、それで終るわ

けではない。最後に最も困難で、しかもまだ未開拓な次の問題がとりあげられなくてはならない。

すなわち、第三に、社会統計的因果研究。社会的集団は非同質的集団であり、原因原理を成立させる一般的恒常的原因の想定が許されない。しかも、統計的集団といえども理念型としての社会的集団に可能な限り近く構成されなくてはならなかった。このような統計的集団に確率論を適用するための実質的な前提をみいだすことはほとんどできない。ここでは確率論的な計算 (Kalkül) は不可能で、それをもとにした因果研究—ストカステイクによる数理的推論—を断念しなくてはならない。社会統計学ではそれにかえて、数值的表示をもたない確率論理による確からしさについてのより客観的な判断を追求しなくてはならない。いままでこの非数理的確率判断のための方法論が欠けており、今後この判断様式の規則を展開、確立してゆくことが是非とも必要となる。ハルトヴィック—さらにフランクフルト学派—は、ストカステイクを狭い確率数理にもとづいた推論に限定しない。統計的集団一般への確率論理 (確率計算ではない) の適用をストカステイクと考え、社会統計的研究に固有のストカステイクを展望する。

以上のような考えに立って構成される社会統計学をハルトヴィックは「批判的社会科学的統計学」 (Statistik, S. 265.) とよぶ。批判的というのは認識批判を徹底的におしすすめ、社会統計的認識の究極の成立原理を問いただし、またこのことによって数理統計学との根本的な対立点を明確にする、との意味がこめられていると考えられる。このようにして、ハルトヴィックにおいて、従前から数理的、非数理統計学として区別されてきた数理統計学と社会統計学との対立は、一方の原因原理に依拠して合法則性研究を志向する自然科学的統計学と、他方の可能な限り理念型に近い統計的概念を用意し現象の意味連関的把握に奉仕しようとする社会科学的統計学の対立へと深められた。ハルトヴィックにおいて、社会現象は確率計算にまつわるすべての制約条件から解放されることはなく、確率論の援用は原則的に拒否されていた。もし、確率数理によら

ない統計学を非数理統計学とよぶなら、ハルトヴィックの批判的社会科学的統計学はあくまで非数理統計学にとどまる。このことに躊躇する理由はハルトヴィックにはない。

この就任講演でハルトヴィックは自己のもつ強い理論的傾向—新カント派の認識論へのいちじるしい傾斜—をうちだした。自然科学と対比させて文化科学の特異性を強調し、その中に社会統計学をくみ入れ、意味連関および理念型把握とのかかわりをもちだす。1953年ハイデルベルク総会時にもこのような論旨の一端がすでにみえていた。しかし、就任講演においてハルトヴィックの社会統計学は文化科学およびその概念構成の特徴を全身におおってあらわれてきている。このことは、あくまで経験に則し社会的集団の計数・計測をめざす社会統計学と理念型の把握を最終目標とする社会科学とのギャップの一層の拡大をもたらす。統計的類概念と社会科学的理論概念の乖離の拡大である。というのは、彼者は経験からの抽象と一般化による理論とモデルの構成にとどまらず、主観のもつ価値と目的表象に関連づけられて意味連関の体系＝理念型に昇華され、経験との距離がますます拡がることになるからである。理念型のもつ主観性・観念性と統計的概念の経験的具体性との間にはさらに大きな隔たりがでてこざるをえない⁵⁾。

このような乖離を結果にもつがために、逆にハルトヴィックにおいては両者を結びつけるための調整作業の意義がより一層強調され、社会統計に独自の測度論構成の必要がくり返し提示されるものと考えられる。調整理論と測度論にますます重い役割が課せられることになる。

1953年総会時とは違い、ハルトヴィックはここでは自己のベシミズムについて直接語ってはいない。確率事象にまつわる合法則性の発現メカニズムの根拠

5) ハルトヴィックのこの講演が社会統計による法則志向の認識を意図的にとりあげた点にフランクフルト学派の理論的前進を認めることができると評価されながらも、しかし、「ハルトヴィックは、社会科学的概念を理念型的なものとすることによって統計的認識＝類概念との間にもつ矛盾しながらも一必然的な関連を切断し、両者の外的調整に調整理論の課題を設定する外に道がなくなった。帰するところ、統計的認識は社会科学的認識の彼岸に残らざるを得ないのである。統計学における不可知論！」（有田正三、前掲論文、60ページ）とする批判がここにてでくる。

—これはいままでドイツ社会統計学で例の一般的原因複合図式によって説明されてきたが一をハルトヴィックは「原因原理」として再定式化し、確率判断を成立させる基本概念＝範疇に位置づけた。そのうえで、社会統計的認識とこの範疇とのかかわりを原則的に拒否した。このことは、ハルトヴィックにおいて社会科学的統計学と統計的因果研究との結びつきをほぼ全面的に断つことでもあった。ハルトヴィックにあっては、法則とは主観の構成機能によってまとめあげられた独立の経験的個別単位の集合・系列にみられる秩序＝分布法則以外のものが考えられておらず、それはあくまで確率論的性格を帯びたものでなくてはならなかったからである。社会統計学とストカスティッシュな合法則性との関連がとどえる点で、ハルトヴィックのペシズムはより深刻になっているといわざるをえない。

しかしながら、このペシズムの根源はただハルトヴィックの強い理論的個性だけに求められるべきではない。そもそもハルトヴィックはストカステークに対してフラスケンパーの残した課題の解決をまかされた者としてフランクフルト学派の中にあらわれた。フラスケンパーは、社会現象にしめる数量の制限された意義と数量化に伴う方法論上の困難をとりあげ、社会統計学を社会的集団の計数・計測、そして計算のための概念的、方法手続的規定にかかわる社会算術とみなした。そこでは大数法則の活動領域はごく限られたものであり、確率論を基調にしたストカステークの役割も原則的に否定された。しかし、この拒否に一抹の不安をもっていたフラスケンパーは確率論とストカステークの基本性格の解明をハルトヴィックにまかせたのであった。フラスケンパー統計方法論を継承し、そのうえで社会統計的認識とストカスティッシュな認識との方法原則上の相違を根本的に問いつめようとしたのがハルトヴィックであった⁶⁾。

6) フラスケンパーからハルトヴィックに与えられた最初の研究テーマは、「認識論的にも、なおかつ実務的にも極めて重要な確率計算、ないし確率論の社会統計学に対する役割」(P. Flaskämper, Mathematische und nichtmathematische Statistik, *Die Statistik in Deutschland nach ihrem heutigen Stand*, Bd. 1, hrsg. von F. Burgdörfer, 1940, S. 44.) を究明すること

ところで、フラスケンパー統計方法論には次のような方法論上の脆弱性が含まれていた。それは、第一に、社会現象にあらわれる量的側面の客観性の軽視—社会現象の量を質と結びついた対象そのものの契機のひとつとしてではなく、認識主体の論理的整合能力による加工の結果とみる。第二に、数理的手法の中立性への過信—もともとストカスティッシュな構図と結びついて成立した数理的統計手法を単なる数理解析技術とみなしうる、あるいはみなしえないまでももとの構図と切り離して、社会統計方法の中へ移植することができるとする。以上の二点であった⁷⁾。当然のことにこの弱さはハルトヴィックの理論展開をも制約する。そして、ハルトヴィックは以下のような考え方をとることによってこの二つの脆弱さの一方を排除したが、一方をより増幅させることになる。まず、後の方の論点について、「原因原理」が定式化されることによってハルトヴィックにあってはストカスティックと社会統計方法との原理的対立が徹底化された。しばしばみせた数理的手法へのフラスケンパーの妥協はハルトヴィックにはみられない。フラスケンパーから与えられた課題への回答は、ストカスティックの社会統計的認識におけるより徹底した拒否であった。フラスケンパーの方法基準＝認識目標の二元論をあくまで追求することによって、フラスケンパーに残っていた躊躇をとり除くことになった。次に最初の論点に戻ると、社会科学的認識の「理解」的方向を志向する中で、ここでもハルトヴィックはフラスケンパーに従いながら、究極にはそれをのりこえる。社会生活の意味連関を重視し、文化科学独自の理念型と結びついた概念構成方法を強調する点ではフラスケンパー以上である。ここに経験的類概念でしかない統計的概念と社会科学的概念＝理念型との間隔はますます大きくなる。調整の必要がさらに大きくなり、その役割はより一層重くなる。

ハルトヴィックはフラスケンパーの方法論に沿いつつそれを認識論的により

とであった。この研究成果がハルトヴィックのゲーテ大学へ提出された博士論文に他ならない。

H. Hartwig, *Die stochastischen Grundbegriffe der Statistik*, 1942.

7) これについてより詳しくは、拙稿「現代フランクフルト学派統計学の形成—フラスケンパーの原則—」『人文』（京都大学教養部）第32集，昭和61年3月，58-69ページ，を参照されたい。

深く追求することにより、一方の理念型への志向と他方のストカステークの拒否へゆきついた。しかし、統計的認識の次元で考えてみると、これはひとつの大きなジレンマである。理念型の志向、つまり理解的認識にとり数と数量関係のもつ意義はますます劣ったものになる。ハルトヴィックにおいては数量をととした法則性の追求はストカステークの様式にのっとり事象の分布法則を探究することであった。ところが、社会認識において、理解の方向が本来的なものとなりストカステークが原則的に拒否されるとすれば、法則性を追求する余地が全くなってしまう。社会認識と法則把握との完全な遮断である。このような中で社会統計的認識は社会認識において一体いかなる意味をもちうるのか。意味連関の把握にとっては役割の劣った単なる社会現象の計数・計測の術、あるいはせいぜい合理的な測度論としてしか存在意義をもちえないのではないか。ハルトヴィックのいう社会統計的認識を追求するほど、それは理解的認識との距離を詰め一たとえ、調整作業によって両者の橋わたしがどれだけ計られようとも一、逆にまた法則志向的認識とのそもそもの溝がますます深くなる。ハルトヴィックのゆきついた先は出口のない袋小路であった。

フラスケンパーのみせたプラグマティックな態度、安易な妥協はこのジレンマに陥ることを未然に防いだ。すなわち、意味連関の世界を志向しながらも、統計的認識のもつ社会算術としての実際の効用を高唱し、またストカステークを否定しながらも、現実には数理的手法の導入を可能な限り許容していた。だが、ハルトヴィックはいずれの点でもフラスケンパーの躊躇と妥協にあまらずることができず、その結果ぬけだすことのできないジレンマに陥ってしまった。既述のように、それを主観的にペシミズムとも感じた。

このジレンマからぬけ出る途は、社会統計的研究にも法則と因果関係研究の場の成立を認め、統計利用にもとづく社会的因果研究(統計を媒介にした構造的特質・矛盾、歴史的発展傾向の析出と説明)を展開することである。単なる計数と計測の術、または測度論をこえて法則追求と社会統計的認識とのかかわりを確立することである。確かに、ハルトヴィック—そしてフランクフルト学派

一も社会統計による因果研究の必要を認め、それへのとり組みを再三にわたって強調していた。だが、それは一たとえ非数理的な形のものであれ—あくまでストカスティッシュな性格のものとしてしか構想されていない。しかも、この非数理的でより一般的な確率判断様式＝社会統計のストカスティックはプリントにおいてもハルトヴィックにおいても単なる提唱に終り、何ら具体的な肉づけを得ることはなかった⁸⁾。またさらに、この社会統計のストカスティックの実現が少しでも進歩したとして、これが理念型を追求する本来の社会科学的研究目的とどう関連するのか、という新たな問題も予想される。結局、社会統計のストカスティックを展望しながら、理解的把握の壁とぶつかり、またその方法もストカスティッシュな性格のものとしてしかイメージできなかったところにハルトヴィックのベシミズムの根源があるように考えられる。ハルトヴィックに学び、その理論的傾向の一面を受けつづことになる G. メンゲスはこのハルトヴィックの陥った事態をのちに「悲劇」⁹⁾ (Tragik) とよんでいる。

III 二つの途—むすびにかえて—

メンゲスはハルトヴィックへの追悼文の中でそのベシミズムを次のように説明している。ハルトヴィックは一方の理解哲学—事象の意味を理解する—の伝統に完全に従いつつも、他方の説明哲学—原因原理にもとづいて事象の法則性

8) 少なくともハルトヴィックに関してはこの試みは失敗に終わったとみなさなくてはならない。これは次の事実からもうかがえる、戦前の『国家学辞典』のあとを受けつづ、戦後の西ドイツでの社会科学研究成果を集大成した『社会科学辞典』全12巻、がある。その中でフラスケンパーは社会統計学派を代表して「統計学」、理論・一般統計学、の項を執筆している(ちなみに、フラスケンパーに対抗して、同じく「統計学」、理論・数理統計学、の項を書いているのがミュンヘン大学の O. アンダーソンである)、末尾にある参考文献のひとつに、H. Hartwig und G. Menges, Die nichtstochastischen Erkenntnisfunktionen der sozialwissenschaftlichen Statistik (P. Flakämper, Statistik, [II] Theorie, (1) Allgemeine Statistik, *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*, Bd. 10, 1959, S. 46.) を掲げ、これを「P. フラスケンパー記念用に準備中」としている。しかし、現実にはこの共著は発刊されていない。確率数理にとらわれないより一般的な確率判断様式はハルトヴィックの下ではついに具体化されなかった、とみることができる。

9) G. Menges, Ätialität und Adäquation—Dem Andenken an Heinrich Hartwig (1907–1981), *Statistische Hefte*, Jg. 22, 1981, S. 148.

を解明する一の意義を認めていた。しかし、社会科学的統計学はただ理解のみに役立ち、説明の力をもたないことに恐れを抱いていた、と¹⁰⁾。確かに、ハルトヴィックのペシミズムは彼を萎縮させた。事実、1950年代後半からその死（1981年）にいたるまで、ハルトヴィックには社会統計方法論上での彼の理論展開—社会統計学におけるストカステークの構成—を示すものは残されていない。フラスケンパーの残した課題を論理的に深く追求するあまり、社会統計的認識の可能性を狭く限定してしまい、それをつき破る方向性を自ら見失ってしまった結果と思われる。

ジージェックとフラスケンパーをフランクフルト学派統計学の第一世代—時期的には1920-40年代—とよべば、それに続くフラスケンパー自身をも含み、フラスケンパーの原則を受けつぎ、より一層の展開を計ろうとしたプリント、ハルトヴィックの世代—1950-60年代—を第二世代とみることができよう。さらに、60年代以降70年代に入って、フランクフルト学派は同じフラスケンパーの門下でありながら、その方向性に少なからざる相違をもった二人の論者をうみだす。一方はすでにふれたメンゲスであり、他方はプリントのあとを受けて現在ゲーテ大学統計学セミナーを主宰する H. グローマンである。これらをフランクフルト学派の第三世代とみなし、現代フランクフルト学派統計学とよぶことができよう。

この第三世代—現代フランクフルト学派統計学—に属する論者はいずれもハルトヴィックのペシミズムをいかに克服するか、という問題意識を潜在させてもっており、その克服の努力が彼らの研究に対する大きな動機になっていると考えられる。では、彼らほどのような意図と方向でハルトヴィックのペシミズ

10) このようなハルトヴィックはメンゲス相手に「極めて深刻なペシミズムをいく度も語った」(G. Menges, *Ätialität und Adäquation*, a. a. O., S. 148.) とのことである。ただし、ハルトヴィックから多くを学んだメンゲスではあるが、ハルトヴィックのペシミズムに同調したり、それに近づくことを極力避けていたようである。ハルトヴィックはメンゲスが「そのペシミズムに同意できないということも知っていた。」(ebenda, S. 148.)。少しあとに触れるように、メンゲスの旺盛な研究活動を促したひとつの動機は、このハルトヴィックの影、あるいはかげりから極力のがれようとする中にあったと考えられる。

ムをのりこえようとするのか。以下、それを概括し、現代フランクフルト学派統計学のかかえる難問をさぐってみよう。

まず、メンゲスの考える方向がある。メンゲスはフランクフルト学派の主張してきた社会統計的認識の構成諸原則が決してこの学派に固有のものではなく、その狭い限定に反対する。逆に、それらが種々ある現代的思潮と多くの共通点をもつことを力説する¹¹⁾。例えば、フランクフルト学派の唱える認識目標の二元論は、近時 W. ウリクトラによって主張されている科学的認識における「説明と理解」の併存と相通ずるものをもっている。また、ハルトヴィックの原因原理は R. カルナップ流の帰納論理学と統合されることによって、統計的推論の成立根拠を強化することにもなる、等々。このようなメンゲスの観点からすれば、モデル構成、確率論的推論、決定理論、情報理論などの近代的数理統計的手法と社会統計的手法とを融合させる可能性は考えられる以上に多くあるはずである。このため、社会経済現象に対してもさほどきびしい条件・仮定をもたない数理モデルを構成し—ソフトなモデルビルディング—、多方面にわたるデータ蒐集、加工、編纂、要約に数理的手法を最大限適用する。これをつうじ、現象の記述と説明を効果的に行い、さらに行動選択の決定基準を提示する。データ利用をとおした記述、説明、決定がメンゲスの社会統計方法論の目標となる。メンゲスはハルトヴィックから調整理論と原因原理を受けついではいるが、文化現象なり自然現象なりへのそれぞれの狭い限定にとらわれない。ここから、社会統計的認識を理解志向の枠の中に固定せず、原因原理を社会統計的認識にも拡張しようとする。数理モデルと経済的現実とのずれを最大限うめつつ—メンゲスの調整はここに成立する—、モデルに社会現象を吸収し、そのあとはモデル分析手法としてすでに確立している種々の数理解析手法を受け入れ応用してゆく¹²⁾。

11) G. Menges, *Deskription und Inferenz, Moderne Aspekte der Frankfurter Schule, All. St. Ar.*, Bd. 60, 1976, S. 293 ff.

12) G. Menges, *Die statistische Adäquation, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 197, 1982, SS. 289–307.

このような融和的な統計学をメンゲス自ら「適応統計学」¹³⁾ (Adaptive Statistik) とよぶ。適応統計学に特徴的なことは数理統計学へのそのいちじるしい傾斜である。そこにはハルトヴィックのかげりなど少しもみられない。この方向はメンゲス門下の若手研究者を中心に「メンゲス学派」¹⁴⁾ とよばれる潮流を形成し、現在に及んでいる。メンゲスの死(1983年1月)によって、彼自身の研究は停止したが一なお、メンゲスの最後の著作『統計学—統計作業の12段階—』¹⁵⁾ はうえの適応統計学の研究過程を段階的に整理したものに他ならない、メンゲス学派の活動は今後も西ドイツ統計学界の中で少なからぬ影響をもち続けるものと思われる。確かに、ハルトヴィックのペシミズム克服のひとつの途ではある。

次にグローマンの方向がある。すでにみたように、プリントの1953年ハイデルベルク報告には社会統計的認識と確率論的手法とのかかわり方として次の三つの場面が示されていた。すなわち、ストカスティック応用のための条件を人為的に作りだすことのできる場合、応用のための前提が厳密には成立しないため、数学的精確さを犠牲にすることにはなるが、それよりも事物論理的な意味の明確な数理的概念なり手法を確立してゆく場合、そしてストカスティック適用の条件が全くない場合であった。この基準にひき戻して考えると、メンゲスは第一と第二の場面にまたがり、できるだけ広い領域を数理的手法適用のために用意し、そこにソフトなモデルを構成し、適応統計学成立の可能性と現実性

13) G. Menges, Adaptive Mustererkennung, *Statistische Hefte*, Jg. 20, 1979, SS. 22-38. Adaptive Statistik-Bemerkungen über neuere Bestrebungen in der statistischen Methodologie, *Statistische Hefte*, Jg. 21, 1981, S. 199 ff.

14) H. Strecker, Günther Menges in memoriam, *All. St. Ar.*, Bd. 67, 1983, S. 401. この「メンゲス学派」の理論的活動については、B. Leiner, Notes on etiality, the adaptation criterion, and the 'inference-decision' problem, G. Menges (ed.), *Information, Inference and Decision*, 1974, pp. 63-73. を参照。しかし、そこにはメンゲスとドイツ社会統計学、ことにフランクフルト学派統計学との関連についてはほとんど配慮されていない。

15) G. Menges, *Die Statistik-Zwölf Stationen des statistischen Arbeitens*, 1982. なお、メンゲスの追悼論文集, H. Schneeweiss and H. Strecker (eds.), *Contributions to Econometrics and Statistics Today*, 1985, pp. 291-307. にはメンゲスの旺盛な執筆活動の成果が目録としてまとめられている。

を追求した、といえよう。これに対し、ストカステック成立の条件が全くない第三の場合、社会経済統計を利用した「証明」(推測)の方法はいかにあるべきか。グローマンの問題意識はそこにあり、それとのとり組みが自己の教授資格取得論文『経験的経済研究における統計的推測の問題点』¹⁶⁾であった。まさしく、グローマンはプリントとハルトヴィックの提起し、解決できなかった課題をひきついで直接の理論的後継者である。

さて、グローマンはメンゲスとは違い、あくまで社会統計的認識とストカステックの融合には反対する。そのうえでなお、現実のさまざまな社会経済的理論研究・実証研究、政策問題(経済・社会政策の立案、選択、決定)からたえず提起されるデータ蒐集、整理、利用にまつわる方法手続上の問題をくみあげ、それを社会統計方法論として理論化、体系化することに努力を注ぐ。メンゲスの適応統計学とは異った、実証的経験的経済研究にとみに密着した統計方法論が考えられている。経験的経済研究と実務から多くの問題を吸収し、統計処理上の規則を確立し、数量的帰結に対する判断形成の基準を提示する。またこのことによって経済研究と実務の方向づけを助ける。このことをグローマンは「経済学と経済実務における経験的統計研究に対するできるだけ内容ある研究戦略」¹⁷⁾を展開することと表現している。もちろん、これはデータへ形式的数理的手法を類推適用することではありえなく、かといって、主に記述を目標にしたいままでの統計利用論で全て片づくものでもない。法則的説明、政策選択・決定、予測や管理、こういった局面でも有効適切な統計方法の構成と展開が望まれる。ここで、プリントの提起した、法則志向的認識にかなった社会統計方法論をいかに構成するか、という問題が改めてとりあげられなければならない

16) H. Grohmann, *Zur Problematik der statistischen Inferenz in der empirischen Wirtschaftsforschung*, 1970. フランクフルト大学経済学・社会科学部へ提出された厩大な教授資格取得論文(Habilitationsschrift)である。

17) H. Grohmann, *Statistik im Dienste vom Wirtschaftswissenschaft und Wirtschaftspolitik—Einige methodologische Betrachtungen zu ihren Zielen und Möglichkeiten*, *All. St. Ar.*, Bd. 60, 1976, S. 325. この中に、1970年代以降の現代フランクフルト学派統計学の理論的綱領をみてとることができる。

ない。この構成は、一グローマンの考えでは一、決定論的因果研究やストカスティッシュな合法則性の研究をこえたより高次の法則志向的研究様式を実現してゆくことである。これは、社会的集団現象を対象にして定立される普遍的言明（法則的命題）を経験的に立証する、場合によっては反証するための方法原則を確立することである。経済量（変数）の間にみられる一般的関連、依存関係を取りだし、それを命題化し、経験資料によってテストし、確証ないし反証を得る。このテストをできるだけ頻繁かつ正確に行ってゆく中で、より普遍的で妥当性の高い言明を確保し、理論を豊富化してゆく。グローマンの推測を目標とした社会統計方法論はこのプロセスをひとつの方法行程として確立、理論化することである¹⁸⁾。

できる限り現実の経験的研究と実務に密着し、そこから提起される統計利用上の諸問題をくみあげ解決してゆく。このことによってハルトヴィックの陥ったベンミズムを克服しようとするのがグローマンの方向である。とはいえ、そこに問題がないわけでは決してない。一方の利用論の重視と逆に調査論の軽視、利用論においても、モデル的思考の採用—もっとも、グローマンの場合、数理モデルに限定されはしないのだが—、普遍的言明のテストプロセスへのK. ポパー反証主義の導入、さらに、確率論的素地を払拭した形での数理的概念と手法の受容—この払拭が実際に可能かどうかは別問題—、といった事態があらわれてくる。このような事態をおさえてなお、フランクフルト学派が主張し続けてきた、ストカステイクには決して還元されない社会統計的認識様式の独自性は果たして保持可能なものが、可能とすれば、それはどこにおいてか。グローマンにも極めて困難な問題が待ちうけていると考えざるをえない。

18) この試みのひとつのあらわれとして、H. Grohmann, *Statistik, Allgemeine Methodenlehre, Skriptum zur Vorlesung*, Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main, Institut für Statistik und Mathematik, Teil 1, 1982, Teil 2, 1984. をみることができる。ただ、推測方法を扱った第二部において—もちろん講義録という制約があることを割りいて考えなくてはならないが—、数理統計学の統計的推定法と仮説検定法がそのまま方法論に枠組みされている、などの少なからざる問題を残している。社会統計によるストカステイクをも含んだ社会統計方法論の構成は依然としてフランクフルト学派の最重要課題である。